

(二〇一三年度)

# 10 国語問題 (九〇分)

(この問題冊子は18ページ、三問である。)

## 受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のみミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名とが書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 五、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 六、試験時間中に退場してはならない。
- 七、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 八、問題冊子は必ず持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

宮沢賢治ほど擬音のつくり方を工夫し、たくさん詩や童話に使った表現者は、ほかにみあたらない。眼にうつる事象のうごきを、さかんに音の変化や流れにうつしかえようとした。ほんたいにぴったりした語音があると、すぐにかたちの像に転写できざる資質も、なみはずれていたとおもえる。たとえば「オツベルと象」で稻こき機械のまわる音を「のんのんのん」とあらわす。わたしたちが回転音にふつう与えている「ぶんぶんぶん」といった擬音とどんなにへだたっていることか。のん、のんというのはたんに回転音をしつさいの音に近づけただけでなく、まわっているトッキのある円筒のかたちがあざやかにうかが気がしてくる。だれもこんなふうには、語音とその物のイメージをむすびつけた擬音をつくったものはない。

そしてもつといえは、<sup>2</sup>事象のうごきが音を介して物語化される。「双子の星」のなかで<sup>すいせい</sup>彗星がよぎつてゆくさまを「ギイギイギイフウ」と形容する。この擬音は彗星の擬人化だが、同時に彗星のうごきを童話のキドウにのせて物語化しているのだ。いかにもあえぐように息をしながら、そんな音をたてて彗星が空をうごきまわっているようにおもえてくる。

<sup>3</sup>宮沢賢治は擬音をさらに形而上化するところまでは、つきすすんだ。晩年の未定稿の詩「丁丁丁丁」にでてくる「尊々殺々殺」といった擬音の言葉は、漢字のかたちにつきまとうまがまがしさ、無気味さと、表音がつくっている魂の擦れあう気合いの息づかいのようなものがむすびついて、こころのある状態を音のかたちにしてある。ここまでできてかれが擬音を、たんに音喩(オノマトペ)以上の機能で、じぶんの資質の肉に喰いこんだあたりからとりだそうとしているさまが、つたわってくる。

丁丁丁丁丁

丁丁丁丁丁

叩きつけられてゐる 丁

叩きつけられてゐる 丁

藻でまつくらな 丁丁丁

塩の海 丁丁丁丁丁

熱 丁丁丁丁丁

熱熱 丁丁丁

(尊々殺々殺

殺々尊々々

尊々殺々殺

殺々尊々尊)

ゲニイめたうとう本音を出した

やってみろ 丁丁丁

きさまなんかにまけるかよ

何か巨おおきな鳥の影

ふう 丁丁丁

海は青じろく明け 丁

もうもうあがる蒸気のなかに

香ばしく息づいてうか泛ぶ

巨つほみきな花の蕾がある

(「丁丁丁丁丁」全篇)

「丁」は身体が海の水のなかで、波で岩にたたきつけられる音を表象する擬音だとみられる。そして全体は身体が高熱に浮か

され、苦しさにあえいでいる状態の暗喩になっている。この「丁」は甲乙丙丁の「丁」として、どん尻をあらわす子どものときから馴染ぶかい文字だった。それでいて文字のかたちからくる表象は、どことなく無気味な感じをあたえられる。(「チヨウ」という語音とかたちからくる気味の悪さが、この音喩にふくまれているものだ。)( )のなかの「尊々殺々殺々殺々殺々尊々尊々」／尊々殺々殺々殺々尊々尊々」という繰り返かえしは、熱に浮かされて苦しい身体の状態を、はねかえそうとする病者(作者)の思想の状態が、作者賢治の形而上学である仏典の呪詞にちかい音と、(とうとい)と(ころす)という対照的な意味をあらわす語の組合せ、あるいは(とうとばれる)と(ころされる)という対照的な意味をあらわす語音によって表象された音喩とみなされる。そして詩の前半は高熱にきしむようにうちつけられている病身の状態の暗喩だとすれば、後半は高熱にうなされた幻覚状態の暗喩になっている。この幻覚の風景は、あおしろい明け方の海で、水面から蒸気がのぼって、もやのようなうす白い蒸気のなかに、おおきな花の蕾の幻覚像が呼吸のように息づいてうかんでいる。死の影がちかづいてくる感じをこらえて、立ちむかっているときの幻覚の光景と幻聴の音がえがかれている。ゲニイという人名の由来はまったくわからないが、幻聴のなかでそうきこえた名前とおもえる。単純な音喩でありながら、詩の全体の死のおびえや、怖れの暗喩の役割をはたしているようにみえる。この擬音の機能は、賢治が言語にたくした最後の願望にかなうようにおもえる。

物はうごくとき音にふれる。擬音はこのひとりでにふれた音に、間と切断と持続のパターンをあたえることだ。それは音の幾何学化だといえる。さらに擬音を言葉でいおうとすると、もともと意味をつくる機能を第一義にしている言語を、意味以前のところどとどまるように、<sup>4</sup>分節化の以前の「不完全」な機能でつかわなくては由緒ある擬音にはならない。

ひとつの事象がひとりでにうごくとき、生物が本能的に行動するとき、また人間が無意識に移動するとき、耳にとどく音にふれえないときもある。この音にふれえないうごきは眼でみられることがある。<sup>5</sup>この音にふれないが眼でみえる事象のうごきを、音韻の機能だけであらわしたらどうなるか。これもまた擬音の世界をもたらすにちがいない。うめばちそのうの白い花がゆれるさまが「ぶりりぶりり」と表現されると(「十力の金剛石」、いくらか固い感じのする花の動きがみえるような気がするし、鈴蘭の葉や花が風にふれあうさまが「しやりんしやりん」と音化されると(「貝の火」、わたしたちは花のかたちとうごきを同時

に感じられる気がしてくる。かたちとうごきが音象ともいふべき状態で伝わってくるからだ。

擬音の世界は、分節化できて意味になった言葉を、まだ完全にはしゃべれない乳児期の世界になぞらえられる。また言語障害の世界、高等哺乳動物の世界、鳥類や生物の鳴き声の世界に似てくる。こういうぜんぶをひっくりくるめた音は、<sup>6</sup>幼ない子ども  
の音声でつづられた世界に似ている。そしてこの世界をそうしようとおもって幼稚にしたり、滑稽にしたり、また生き物の音  
声を図式化してみたり、幾何模様に見たりすることでえられる効果とおなじ意味になる。

またほんたいに擬音の世界は、天然の現象、無生物、植物、微生物、虫類、生物などの音声やうごきに半ば意味をあたえ、  
あるばあいには言葉をしゃべるとおなじ擬人化の効果をもたらす。そうすると無機物や有機体の生命の世界が高度になり、ひ  
との世界にまでひきあげられることになる。霧がふるさまが「ぼしやぼしや」とあらわされるとき（朝に就ての童話的構図）、  
針金を鳴らす音を「リラリラ」といつてみたり（「ツエねずみ」）、月の光を形容するのに「ツンツンツン」とあらわしたり（「気のい  
い火山弾」）、鎌がひかるさまを「シンシンシン」とあらわしたり（「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」）しているのを見る  
と、擬音が半ばものをひとに似せ、半ば言葉の意味をあたえる役割をはたしている感じがする。<sup>7</sup>音を半ば擬人化することが、  
半ば意味ある音声になっているのだ。

（吉本隆明『宮沢賢治』）

問一 傍線部1について、筆者は宮沢賢治の擬音のつくり方が私たちとどのような点で「へだたっている」と考えているか。次  
の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ア 私たちが常識的に用いる「ぶんぶんぶん」のような擬音の存在を否定している点。

イ 擬音を音の模写には用いず、語音とその物のイメージを結びつけるために用いている点。

ウ 目の前の事象を、なみはずれた数の擬音をもって文字に定着させようと努力した点。

エ 単なる音の模写にとどまらず、その音を生み出す物を読み手にイメージさせることができた点。

問二 傍線部2はどのようなことを意味するか。説明せよ。

問三 傍線部3はどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ア 擬音とその音にあてた漢字を交錯させて、聴覚的、視覚的イメージの描写のみならず、はっきりとした形を持たない自身の心の奥底までが表出されてしまう形で、擬音を詩作に用いていること。

イ 聴覚的イメージを描写する際に用いられる擬音を多用しながら、観念的な立場からも、自身の心情が議論されるような形で擬音を選んでいること。

ウ 音でたとえるという擬音の機能を最終的に振り捨てて、もっぱら自身の心情をその細部まで表現する手段として、擬音を用いるとどこにまで到達していること。

エ 自身の資質の本質にリアリティーを与えるため、晩年の詩作では、擬音の聴覚的、視覚的イメージを喚起する力を活用していること。

問四 筆者は、宮沢賢治の詩〔丁 丁 丁 丁 丁〕の表現をどのように理解しているか。次の中から適切なものを三つ選べ。

ア 「丁」の擬音としての効果は、身体が波で岩にたたきつけられる音を表現するとともに、身体が高熱に浮かされ、苦しんでいる賢治の状態を直接に写しとっているものである。

イ 「丁」という漢字表記は見慣れたものでありながら、この詩の中では、その発音「チヨウ」と重なりあい、気味の悪いイメージを喚起している。

ウ 「尊」と「殺」の二文字は、(へとうとい)と(ころす)、または(へとうとばれる)と(ころされる)のいずれか一方に解釈されるべきものである。

エ 「尊々 殺々 殺々 尊々々々 尊々 殺々 殺々 尊々 尊」という繰り返しは、仏典の呪詞を思わせる響きを持っている。

オ 高熱で意識のはつきりしない状況で感じた死の予感が、「巨きな鳥の影」という表現の中に込められている。

カ 青白い明け方の海は、死に立ち向かいながらも、それに耐えきれなくなった作者賢治の心象の現れと考えられる。

キ ゲニイという幻聴としての人名は、賢治の死に対するおびえや怖れの理由を暗示している。

ク 「巨きな花の蕾」は、生と死のはざまに踏みとどまるなか立ち現れてきた幻覚像と読み取ることができる。

問五 傍線部4のように筆者が述べるのはなぜか。その理由を説明せよ。

問六 傍線部5について、「この音にふれないが眼でみえる事象のうごきを、音韻の機能だけであらわすとはどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ア 音としては私たちにとどかないうごきについて、視覚的なイメージを聴覚的なイメージで覆うように表現すること。

イ 音を伴わない自然なうごき、本能的・無意識的うごきを、言語音を用いて、対応する概念と結びつけること。

ウ 音を発さないある事象のうごきやかたちを、音のイメージを用いて写し取ること。

エ 耳にはとどかないが、微かに発せられている音を擬音化し、視覚的な印象として提示すること。

問七 傍線部6はどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ア 声に出すこと自体が目的となり、言葉が必ずしも対象の意味を目指していないような世界。

イ 身の周りの事象が、大人と同じような定まった形では、言葉によって分節化されていない世界。

ウ いまだ成長の過程にあるため、発音が十分に習得されないうまま、声に出さざるをえない世界。

エ 分節化によって意味を獲得した言葉と同様に、擬音を用いて周囲の出来事の意味を定着させた世界。

問八 傍線部7のように筆者が述べるのはなぜか。その理由を説明せよ。



問九 次の文章のうち、本文の趣旨に合致すると思われるものを二つ選べ。

ア 宮沢賢治は、詩や童話の中における擬音の使い方に工夫を凝らしたばかりでなく、逆に擬音を具体的な形を持ったイメージに結びつけるという点でも、卓越した才能を発揮したと言える。

イ 宮沢賢治の晩年の創作では、擬音を具体的な音のイメージと結びつけず、文字表記のイメージに寄りかかりながら用いる意図が感じられる。

ウ 擬音とは、物のうごきの中から発せられる音を、その生の音の連続性を生かしながら定着させ、言語音から逸脱したところに成立するものである。

エ 擬音の持つ言語表現としての特質は、一見、読み手の音感覚に頼るところにあるように見えるが、宮沢賢治においてはむしろ、読み手の感覚とは必ずしも一致しない、彼の音感覚の特異性が発揮されるところにその特質がある。

オ 宮沢賢治の作品内における擬音の使用は、眼にうつる事象のイメージを写し取る働きにとどまらず、あたかも意味ある言葉表現しているかのような効果をもたらしている。

問十 波線部 a・b の漢字を書け。

問十一 宮沢賢治が生前出版した詩集の名前を書け。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

東山のかたすみ、あばれて人もかけらぬあばらやに、いとやさしく、いまだ人なれぬ女ありけり。庭の萩原まねけども、風より外はとふ人もなく、軒ばのよもぎしげれども、杉むらならねばかひなくて、月にながめ、嵐にかこちても、心をいたましむるたよりはおほく、花を見、郭公を聞きても、なくさむべきかたは、まれなる事にて、明かし暮らすに、清水詣でのついでに、思はぬほかのさかしらいできて、いたらぬくまなかりし御世に、ただ一夜の夢の契りを結びまゐらせてける。これも先の世を思へば、かたじけなかりけれども、さしあたりて、嘆きに恨みをそへて、心のうちをはるまもなし。かひなくありふれど、いまひとたびの、言の葉ばかりの御なさけだに待ちかねて、よし、これゆゑそむくべきうき世なりけり、と思ひ立ちて、ありし御心しりのもとへつかはしける。

7 なかなかにはぬも人のうれしきはうき世をいとふたよりなりけり

とばかり心にくく、幼びれたる手にて、はなだの薄様に書きたるを、折をうかがひて奏しければ、まことにさることあり。たづねざりける心おくれこそ、と御気色ありければ、やがて走り向かひてたづぬるに、さらぬだにあれたるやどの、人すむけしきもなきを、やや久しくやすらひて、老いたる女ひとりたづねえて、事のやうをくはしくとひければ、何といふ事は知り侍らず。あるじは天王寺へまゐり給ひぬ、といへば、やがてそれより天王寺へまゐり、寺々をたづぬるに、亀井のあたりに大人しき尼一人、女房二三人ある中に、いと若き尼のことにたどどしげなるがあり。この心しりを見つけて、あさましと思ひげにて、ただやがてうつぶして、泣くよりほかの事なし。かたへものども、声を立てぬばかりにて、おとる袖なくしほりければ、御使ひも見捨てて帰るべき心地もせず。大人しき尼は、この人の母なりければ、事のやう細かにたづねけれども、もとよりこれは思ひつる事なり。なにしにかは、君の御ゆゑにて候ふべき。かしこく、といひもあへず泣きて、その後はこたへざりければ、よしなき御使ひをして、かはゆき事を見つるよ、と悲しくて、さりとて、ここにて世をつくすべきならねば、立ち帰りぬ。このよしを奏するに、はしたなの心の立てざまや。心おくれがとがになりつるよ、とて、かひなかりけり。あはれに

も、やさしくも、ながき世<sup>12</sup>のものがたりにぞなりぬる。みそのの尼の心と、いづれか深からむ。

(『今物語』)

〔注〕 東山…京都市内を南北に流れる鴨川より東に連なる丘陵。左京区から東山区の一带を指し、清水寺もその一部に含まれる。

清水…京都市東山区にある寺院。観音霊場として著名。

天王寺…大阪市天王寺区にある寺院。四天王寺のこと。浄土信仰で著名。

亀井…四天王寺境内にある霊水。

みそのの尼…本話の直前の説話の主人公。

問一 傍線部「いとやさしく、いまだ人なれぬ女」の解釈としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- ア 美形ではあるが、教養もなく社会性もない女
- イ 性格が温和で、幼稚なところの残っている女
- ウ 教養はあるが、まだ結婚はしていない女
- エ 気品があつて、社交性も豊かな女

問二 傍線部2「庭の萩原まねけども、風より外はとふ人もなく、軒ばのよもぎしげれども、杉むらならねばかひなくて」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ア 女の家を訪ねる人もいなければ、女が人を訪ねることもなかったこと

イ 女の家を訪ねる人はいなかったが、女はよく人を訪ねたこと

ウ 女が人の家を訪ねることはないが、女の家を訪ねる人は多くいたこと

エ 女の家を訪ねる人もいなければ、女が家で人を待つこともなかったこと

問三 傍線部3「思はぬほかのさかしらいできて、いたらぬくまなかりし御世に、ただ一夜の夢の契りを結びまゐらせてける」とあるが、何が起ったのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ア 天皇の治世はすぐれていたが、何かの間違いで夢のような恋に落ちることとなった。

イ 天皇の治世はすぐれていたが、意外な悪口を言う人がいて謀議に加担することになった。

ウ 天皇の治世はすぐれていたで、その天皇との逢瀬をお節介にも仲介する人がいた。

エ 天皇の治世はすぐれていたで、観音との仏縁を仲介する人と運命の出合いを経験することになった。

問四 傍線部4「先の世を思へば、かたじけなかりけれども、さしあたりて、嘆きに恨みをそへて」とあるがどういふ心情か。

次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ア 前世からの因縁であつたと思うと、もつたないことではあるが、当面はもう一度逢いたいのに逢えないのがつらい気持ち。

イ 前世からの因縁であつても、失礼千萬なことと腹立たしいが、今は我が身があわれでせつなくてならない気持ち。

ウ 来世に生まれ変わることを考えたら恥ずかしい限りだが、今はただ大変なことになつたと自分の運命を嘆いたり恨んだりしている気持ち。

エ 運命だつたと思えばおそれ多い限りだが、あの夜のことが忘れられなくて、往生の支障になりそうなほどに逢いたくてたまらない気持ち。

問五 傍線部5「これゆゑそむくべきうき世なりけり」の解釈としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

ア こういふことがあるから世の中はよくならないのだ。

イ これをきつかけに世の中をよくしていこう。

ウ これをきつかけに出家してしまおう。

エ こういふことがあつても恋はあきらめない。

問六 傍線部6「ありし御心しり」と同一の人物を指すのはどれか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ア 「あばれて人もかけらぬ」の「人」

イ 「いまだ人なれぬ女ありけり」の「人」

ウ 「風より外はとふ人もなし」の「人」

エ 「思はぬほかのさかしら」をした人

オ 「言の葉ばかりの御なさけ」をかける人

問七 傍線部7「なかなか」とはぬも人のうれしきはうき世をいとふたよりなりけり」の歌はどのような意味になるか。現代語に訳せ。

問八 傍線部8「やや久しくやすらひて」とあるが、なぜそうなったのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ア 女の家が随分と田舎にあつて、そこへ行くまでに随分時間がかかったから。

イ 女の家にはもう誰も住んでいなくて、女との逢瀬の約束を果たせなかったから。

ウ 女に会うことができず、どうすれば会えるかもよくわからなかったから。

エ 女はそこにもういなかったたので、役目を果たす必要がないように感じたから。

問九 傍線部9「泣くよりほかの事なし」とあるが、どういう心情か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ア 尼として未熟な姿を見られてしまって、恥ずかしく思った。

イ 今ごろになって会いに来たのかと、恨めしく思った。

ウ 尼になって初めて知人に会い、懐かしく思った。

エ 今になって尼になったことを、悔しく思った。

問十 傍線部10「なにしにかは、君の御ゆゑにて候ふべき」とあるが、なぜだというのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ア 初めて逢ったときから、この日のことは決めてあったから。

イ 初めて逢う前から、こうなることは決めてあったから。

ウ 歌を贈ったときから、この日のことは決めてあったから。

エ 歌を贈る前から、こうなることは決めてあったから。

問十一 傍線部11「心おくれがとがになりつるよ」とあるが、誰のどのような心情か。簡潔に説明せよ。

問十二 傍線部12「ながき世のものがたりにぞなりぬる」とあるが、なぜか。簡潔に説明せよ。

三

次の文章を読んで、後の間に答えよ。ただし、設問の関係で返り点・送り仮名を付していないところがある。

百濟武広王遷都<sup>シ</sup>枳慕蜜地<sup>ニ</sup>、新營<sup>タニつくル</sup>精舍<sup>ヲ</sup>。以<sup>テ</sup>貞觀十三年、歲次己亥

冬十一月<sup>ヲ</sup>天大雷雨<sup>イニシ</sup>、遂<sup>ニ</sup>災<sup>アリ</sup>帝積精舍<sup>ニ</sup>。仏堂・七級浮図乃至廊房、

一皆燒<sup>キ</sup>尽<sup>ス</sup>。塔下<sup>ノ</sup>礎石中有<sup>リ</sup>二種種<sup>ノ</sup>七宝。亦有<sup>タリ</sup>二仏舍利・彩<sup>レル</sup>水精瓶<sup>ニ</sup>。又<sup>タ</sup>

以<sup>テ</sup>銅<sup>ヲ</sup>作<sup>シ</sup>紙<sup>ト</sup>、写<sup>シ</sup>金剛波若經<sup>ヲ</sup>貯<sup>ル</sup>以<sup>ニ</sup>木漆函<sup>ヲ</sup>。發<sup>キ</sup>礎石<sup>ヲ</sup>開<sup>キ</sup>視<sup>レバ</sup>、悉<sup>ク</sup>皆燒<sup>キ</sup>尽<sup>セリ</sup>、

唯<sup>ク</sup>仏舍利瓶<sup>ヲ</sup>与<sup>ニ</sup>波若經漆函<sup>ニ</sup>如<sup>シ</sup>故<sup>ノ</sup>。水精瓶<sup>ハ</sup>内外<sup>ヨリ</sup>徹<sup>ラ</sup>見<sup>ユ</sup>、蓋亦不<sup>レ</sup>動<sup>カ</sup>、

而<sup>シカ</sup>舍利<sup>ニ</sup>悉<sup>ク</sup>無<sup>ク</sup>、不<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>所<sup>ヲ</sup>出<sup>ヅル</sup>。將<sup>モ</sup>瓶<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>歸<sup>ス</sup>大王<sup>ニ</sup>。大王請<sup>ヒ</sup>法師<sup>ニ</sup>發願懺悔<sup>スルヲ</sup>、

開<sup>キ</sup>瓶<sup>ヲ</sup>視<sup>レバ</sup>之<sup>ヲ</sup>、仏舍利六箇俱在<sup>ル</sup>处<sup>ニ</sup>内瓶<sup>ニ</sup>。自<sup>レ</sup>外<sup>ヲ</sup>視<sup>レバ</sup>之<sup>ヲ</sup>、六箇悉<sup>ク</sup>見<sup>ユ</sup>。於<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>、

大王及<sup>ビ</sup>諸<sup>モ</sup>宮人<sup>ノ</sup>倍<sup>マ</sup>加<sup>フ</sup>敬信<sup>ヲ</sup>。發願供養<sup>シ</sup>、更<sup>ニ</sup>造<sup>リ</sup>寺<sup>ヲ</sup>貯<sup>ム</sup>焉<sup>ヲ</sup>。

右一条、普門品云、「火不能<sup>ハ</sup>燒<sup>ク</sup>」。



〔注〕○武広王―百濟第三十代武王、武康王とも。

○枳慕蜜地―地名(未詳、現在の韓国益山のあたりか)。

○貞観十三年―

六三九年。

○級―層。

○浮図―仏塔。

○一皆―全部。

○水精―水晶。

○普門品―『妙法蓮華經』観世音菩薩普門

品の「若しこの観世音菩薩の名を持つ者有らば、設たひ大火に入るとも、火も焼くこと能はず。」にあたる。

問一 傍線部1、2と同じ字義で用いられているものはどれか。それぞれ次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

1 ア 発議

イ 発症

ウ 発掘

エ 発育

2 ア 事故

イ 故人

ウ 典故

エ 故夫

問二 傍線部Xを書き下し文にせよ。

問三 傍線部3は、どういう意味か。次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

ア 仏舍利六個がすべて瓶の中にあつた。

イ 仏舍利六個と瓶内の宝物が一緒にあつた。

ウ 仏舍利は六個とも瓶の中に納めた。

エ 仏舍利は六個とも瓶内から出てきた。

問四 傍線部4の「自」と同じ用法のものはどれか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。(設問の関係で「自」には、返り点・送り仮名を付していない。)

ア 吾<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>衛<sup>ル</sup>婦<sup>ル</sup>魯<sup>ニ</sup>。

イ 非<sup>レ</sup>人<sup>ヲ</sup>自<sup>レ</sup>是<sup>トス</sup>。

ウ 自<sup>レ</sup>非<sup>ニ</sup>聖<sup>人</sup>、外<sup>ヲ</sup>寧<sup>ム</sup>必<sup>ズ</sup>有<sup>リ</sup>内<sup>憂</sup>。

エ 君<sup>自</sup>行<sup>レ</sup>之<sup>ヘ</sup>。

問五 傍線部5について、大王たちの信心がさらに深くなったのはなぜか。その理由を述べよ。

問六 帝釈精舎が被災したのに仏舍利瓶などが燃えなかったのはなぜだと言っているのか。その理由を述べよ。

問七 傍線部6について、何を納めたのか。本文中より書き抜け。

問八 本文中の漢字の用法で仮借にあたるものを次の中から二つ選べ。

ア 金剛    イ 精舎    ウ 舍利    エ 懺悔    オ 帝釈    カ 波若

問九 この説話を通して何を語ろうとしているのか。簡潔に述べよ。



